

丹波の老舗企業を紹介 第4弾  
明治37年創業 東洋製材所



地元で製材業を続けたい  
キーワードは「挑戦」

明治37年（1904年）に創業し、柏原地域で製材業を営む東洋製材所。現在は4人で、木材市場で仕入れた木などの製材・販売や、建築施工を行っています。

創業115年目の今年、3代目の上田棟次郎さんに商売に対する思いなどを伺いました。（写真中央）

職人を雇って製材業を創業

初代はもともと大工をしており、当時家を建てるには、まず山から木を切ってきて角材を作る必要があります。家を1軒建てるのにも長い時間がかかったので、木を製材する小挽職人を35人雇って、角材を作って売る商売を始めました。昭和55年に事業を継いでから、重い丸太を運ぶなど昔ながらの人力作業を楽にしたいと思い、先代を説得してレッカー車を購入しました。資金繰りには苦労しましたが、できるだけ足を動かして営業し、人とのつながりの中で何とか仕事を続けることができました。

端材を集めて「木木市」を開催

ある製材所を訪れたとき、倉庫の片隅にケヤキや楠など良い木の製材品が売れずに残っているのを見つけました。良い木材があっても買い手に目をとめてもらえないという状況を変えたいと思い、市内の各製材所に眠っている端材を集めて一般の人に売る「木木市」という市場を始めました。

新聞やチラシで広告を出し、多くの人に集まってもらうことで、初回で数十万円分の木材を売ることが

できました。それから毎年2回、春と秋に市を開催し、多数の愛好家に利用いただいています。

ログハウスを建築・販売

北海道で見たログハウスの住み心地に惚れ込んだ4代目が、ログハウスの建築・販売を始めました。ログハウスは全部丸太で作るため、木をしつかりと乾燥させないと変形します。また、丸太の加工に技術が必要のため、建築や管理にはノウハウが必要です。他市からモデルハウスを見学に来られることもあり、新たな販路としてログハウスの建築・販売も続けていきたいと思っています。

市内の木を使いたい

市内の山は植林後30年以上が経過し、育った杉やヒノキを適切に間伐しないと災害の危険性が高まり、花粉症も増加するという状況にあります。ただ、山から木を運ぶ管理道がないため、宝の山を目の前にして、地元の山に入れないような状態です。市内の木材を利用して建物を建てるなど、木を活用する場所を作っていくことで、少しずつでも地場産材の良さを分かってもらい、木材利用の循環につながることを願っています。